

7	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14104020	高等動物の神経発達に対する内分泌攪乱化学物質の影響に関する研究	吉川 泰弘 (東京大学・大学院農学生命科学研究科・教授)	B
<p>(意見等)</p> <p>内分泌かく乱化学物質の次世代の神経行動発達への影響を霊長類で調べたという点で、一定以上の学術的評価は下されるものと判断できる。特に、ダイオキシンにより新生児の社会行動異常、BPAにより性同一性障害様所見、PCB 高濃度曝露により高度認知機能の低下が見られることを明らかにした点は評価できる。</p> <p>しかし、研究成果の機能的統合によるヒトへの外挿に関しては、明確な記載が見られなかった。また、培養細胞系を用いた研究成果は、リスク評価の初期段階のレベルであり、複数のアッセイ系の相互関係も明確ではないと判断せざるを得なかった。</p>				
8	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	15101004	単一生細胞成分の経時的ナノ分析：機能分子の採取・同定・注入法の開発	猪飼 篤 (東京工業大学・大学院生命理工学研究科・教授)	A
<p>(意見等)</p> <p>単一細胞の中に薬物を注入・採取する方法は、これまで基本的には顕微鏡観察下、マイクロピペットで行われてきた。</p> <p>本研究は、原子間顕微鏡の位置精度の高さを利用して、高精度の細孔を細胞壁に作成し、その細孔から薬物の注入、あるいは、mRNA を採取することによる細胞内反応をしらべる技術の検討である。長年の AFM の研究から構築した手法であり、開発・検討された本手法が広く関連分野に普及されていると評価でき、細胞生理学、生化学のさらなる発展に繋がることが期待される。</p>				